

京都の喫茶店文化の可能性を探りたい

文化が幾重にも交わる京都は、伝統と革新が共存する地。京都府は、アートを通じて地域と事業の新たな可能性を開いている。アートがもたらす価値と経営戦略とはどのようなものなのか？ 喫茶文化の可能性を追求する「前田珈琲」の取り組みにフォーカスする。



「前田珈琲」は現在、京都市内に16店舗を展開する。注目すべきはその数だけではない。京都の地の利を最大に生かした出店先だ。明治2年築の旧小学校校舎、辰野金吾設計の京都文化博物館別館、モダニズム建築の最高傑作の一つと評される国立京都国際会館、日本最古の現役官公庁舎である京都府庁旧本館、そして二条城。前田珈琲を巡れば、それだけで贅沢な京都建築散歩になる。

「父は『イノダコーヒ』初代の猪田七郎氏の下で学び独立をしました。次の世代として、僕は何をしていけばいいんだろうと考えたんです」

1971年創業の「前田珈琲」2代目・前田剛さんはそう語る。

割烹などの高級レストランでもない日常の場所、コーヒー一杯で誰で

VOL. 02

Where Art Meets Business



—— 有限会社 前田珈琲

国の重要文化財でもある京都府庁旧本館内の前田珈琲「salon de 1904」店内。
作品は『I'm looking at you』高瀬菜葉 タイトル横の作品は『異思』木村舜



6	5	2	
	4	3	1

1. 京都府庁旧本館内にある「salon de 1904」店内。元は京都府庁の執務室。扉一枚で連なる四つの空間に、おおらかにアートが配置されている。右奥／『ずっと誰かと、一緒だった気がする。』川村摩那、中（立体）／『Enigma（完全には理解できない）』串野真也、中央／『一切衆生』木村舜、左／『鏡の中の体』橋葉月。2. コーヒー一杯で、誰でも気軽にアートに親しめる。3. 京都府庁旧本館の美しい前庭を望むロケーション。4. 社名を記したロゴは、アルファベットの組み合わせで漢字を創作する徐氷（シュ・ビン）の作品。5. 京都芸術センター内にある「前田珈琲 明倫店」はキッチンがまるごと現代アート作品。現代美術家・金氏徹平と建築家・家成俊勝の協同制作。6. アート作品からメニューが提供される。ユニーク！

も訪れることのできる喫茶店に、名建築×アートという贅沢が差し出されている。意識したのは「また訪れたくなる」場所の気配だ。

家業に入るタイミングで旧小学校の校舎を活用した「京都芸術センター」内に2号店出店の打診があった。父は乗り気ではなかったが、挑戦を決めた。これが「前田珈琲」についての2000年代の幕開け。

「店内にも作品を飾ったり、ダンスパフォーマンスをしてもらったり、コラボレーションメニューを開発したり。振り返れば、あれがアートへの入り口だったような気がします」

それまでアートには興味がないと思いついていたが、実は生まれ育った京都のまちで、ずっと身近にあった芸術文化。件の出店を勧めたのも、本店のお客さまだった狂言師の茂山あきら氏だ。さらには当時京都芸術センター館長を務めた千宗室氏（茶道裏千家家元）から茶の湯の世界へ導かれたことも、30代を迎えようとする前田さんが改めて芸術文化をとらえ直す大きな契機となった。

「喫茶店として、芸術文化のまち京都と一緒に生きていきたいと考えたようになっていました」

人と出会うことで開く扉。歴史的建築物へ続々進出

アートと近代建築。これでいくんだと宣言するように、20代の前田さんがカタチにしたのが現在の「前田珈琲」のロゴだ。アジア・欧米の現代美術界で先導的役割を果たすアーティスト、徐氷（シュ・ビン）に直接手紙を送って実現させた。

「これが、僕が初めて買ったアート作品かもしれませんね」

アーティストとの交流が増える中で獲得していく感性は、経営者としての前田さんを心地よく刺激した。「現代アートはどう見ればいいのかわからないと言われがちですが、作家本人と会って直接話を聞くと、作品が見えるようになる。不思議やな、これは面白いな、って思いました」

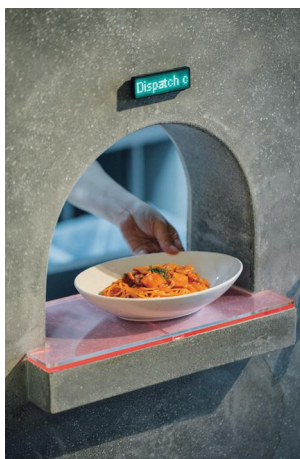
活躍の場を求めるアーティストたちと、地元経営者である前田さんとの人脈。その、ありそうでない出会いの場から湧きあがる「一緒にやれば面白いんじゃないか」というアイデアは、事業に新風を吹き込んだ。

2号店「明倫店」では、アーティストとのコラボにより、店舗の厨房を『tower (KITCHEN)』という現代ア



GO MAEDA

前田 剛（まえだ・ごう）●有限会社前田珈琲代表取締役。1972年京都生まれ。大阪工業大学工学部卒業後、家業の「前田珈琲」へ。2000年に京都芸術センター内に明倫店を出店し話題を集めた。2004年に「前田珈琲」を法人化、現在京都市内に16店舗展開、北京（中国）へも進出。



経営× アートの 交差点

Where Art Meets Business

すべては小さな一歩から。
常に変化を楽しんでいます

トの作品として生まれ変わらせる実験的な取り組みも実施。アートと喫茶文化を横断する場として話題を呼び、視察や取材が相次ぐなど、新たな客層との出会いにもつながった。

以降、前田さんは「Art Collaboration Kyoto(ACK)」「ARTISTS' FAIR KYOTO(AFK)」といった、京都府が展開するアートフェア事業にも欠かせないキーマンとなっていく。

**数字だけでは測れない
美意識と誇りを育む**

大学では工学を学んだ前田さん。数字で答えを導き出すのが得意な理系人に「答えない世界」を教えてくれたのもアートだった。

「そんな角度からモノを見ることができるとか！という驚きがあり、グシャグシャになった頭の中から、ドーンと爆発して目の前に立ち現れたような作品に刺激を受けます。答えないところから価値を立ち上げる思考は、商売や新しい事業を考え

る上で、とても大切なヒントになりました。まずは1点でもいい。気に入ったアートを買って、日々目にする場所に置いてみることを、周りの経営者にも勧めています」

「前田珈琲」は中国にも進出している。そのための視察で北京郊外の「798芸術区(798 Art Zone)」を訪れたことも前田さんを刺激した。かつての国営工場を世界有数の現代アート拠点に塗り替えたのは、市民、アーティストの力だった。京都においてアートが集積するエリアはこれから待ち望まれるところだが、まち全体にそんな一面があるのかもしれないと前田さんは考える。

「府市が目指す〈街の中に芸術文化があふれる街、京都〉には、卓越した伝統芸能・文化だけではなく、喫茶店、銭湯、コミュニティといった町衆に根付く生活文化も含まれます。みんなが各々の仕事に誇りを持って向き合える。それを文化のあるまちというのではないのでしょうか」